

那覇市文化財調査報告書 第55集

# 松 山 御 殿 跡

— マンション建設工事に伴う緊急発掘調査報告 —

2002年3月

那覇市教育委員会

那覇市文化財調査報告書 第55集

# 松 山 御 殿 跡

— マンション建設工事に伴う緊急発掘調査報告 —

2002年3月

那覇市教育委員会



# 序

この報告書は、マンション建設に伴う埋蔵文化財「松山御殿跡」の緊急発掘調査の成果を収録したものです。

発掘調査は、2001（平成13）年1月に行われました。

松山御殿跡は、首里桃原町に所在し、松山王子尚順のかつての邸宅跡です。古都首里は、琉球王国時代の政治的中心地として栄え、2000（平成12）年12月に世界遺産に登録された、琉球国王の居城である「首里城跡」や第二尚氏歴代国王の墓「玉陵」、国家的な祭祀を行う場所の一つであった「園比屋武御嶽石門」の所在地でもあります。第二次世界大戦中、首里は多くの貴重な文化財を戦災で失いました。戦後は、住宅建設・道路敷設工事等の諸開発の増加に伴い、王国時代の屋敷跡にわずかに残る石垣や石畳道なども取り壊され、古き都の香りは次第に失われつつあります。現存する文化財をなるべく後世に残しつつ、いたしかたなく破壊されるものについては記録保存のかたちをとって発掘調査を行い、首里のもつ歴史的な厚みを知る手掛りを今後に残すことが、今の私たちに託された重要な課題であるといえるでしょう。

本書が多くの方々に有効に活用されることを希望するとともに、文化財愛護思想の高揚と諸開発計画における保存協議の円滑な推進に寄与することを期待するものであります。

2002年3月

那覇市教育委員会

教育長 渡久地 政吉

# 例 言

- 1、本報告書は、平成12年度に実施した「松山御殿跡緊急発掘調査」の成果を収録したものである。
- 2、本発掘調査は、株式会社沖縄大京によるマンション建設に伴うもので、株式会社沖縄大京から那覇市教育委員会が委託を受けて実施した。
- 3、本報告書に掲載した空中写真および地形図・国土基本図は、国土地理院発行のものを複製した。また、第3図の遺構位置図は、株式会社沖縄大京からの提供による「首里桃原建設地現況測量図」（原図のスケールは、250分の1）に調査対象となった遺構（方形土坑）の位置を記入したものである。
- 4、本報告書の編集は當銘由嗣が行い、執筆分担は下記のとおりである。

第Ⅰ～Ⅲ章	當銘由嗣
付篇	古塚達朗
- 5、調査現場での実測図作成作業は、奥濱悦子・照喜名武子・宮城新一の3人が行った。
- 6、資料整理は、親泊育子が行った。また、栗山初美・杉村千重美・上良早美・栄野元左季の4氏から絶大なる協力と援助を頂いた。4氏の協力がなければ、本報告書のすみやかな刊行はなかったであろう。そのほかにも、城間千栄子・大城弘子・島袋利恵子の3氏を含む文化財課資料室の方々から、様々な点について助言・協力があった。ここに記して、感謝の意を表する。
- 7、出土遺物は、那覇市教育委員会文化財課で保管している。

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	まつやまウドゥン あと							
書名	松山御殿跡							
副書名	マンション建設工事に伴う緊急発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	那覇市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第55集							
編著者名	古塚達郎 當銘由嗣							
編集機関	那覇市教育委員会文化財課							
所在地	〒900-8553 沖縄県那覇市樋川2-8-8 TEL098-853-5776							
発行年月日	西暦 2002年 3月 31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m <sup>2</sup>	
まつやまウドゥン あと 松山御殿跡	おきなわけんなはし 沖縄県那覇市 しゅりとうばるちよう 首里桃原町  1-11-6	47201		26度 13分 23秒	127度 42分 59秒	20010109 } 20010119	8	マンション建設工事に伴う緊急発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
松山御殿跡	屋敷跡	グスク時代 近世・近代		方形土坑（1基）		白磁 青磁 青花 五彩 褐釉陶器 白釉陶器 瓦質土器 沖縄産陶器 明朝系瓦		尚泰王四男松山王子尚順の屋敷跡。それより前は、湧川殿内の屋敷跡であったと考えられる。



# 目次

序

例言

報告書抄録

## 本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査組織	1
第Ⅱ章 調査の成果	4
第Ⅲ章 まとめ	11
付篇 旧松山御殿敷地の歴史的経緯について	12

## 挿図目次

第1図 那覇市の位置	2
第2図 那覇市内の遺跡分布図	3
第3図 遺構位置図	5
第4図 遺構平面図・断面図・立面図	6
第5図 陶磁器	9
第6図 明朝系瓦	10

## 挿表目次

第1表 陶磁器観察一覧	8
第2表 明朝系瓦観察一覧	8

## 図版目次

PL.1 遺跡周辺の空中写真
PL.2 調査状況(1)
PL.3 調査状況(2)
PL.4 陶磁器
PL.5 明朝系瓦

# 第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査組織

## 第1節 調査に至る経緯

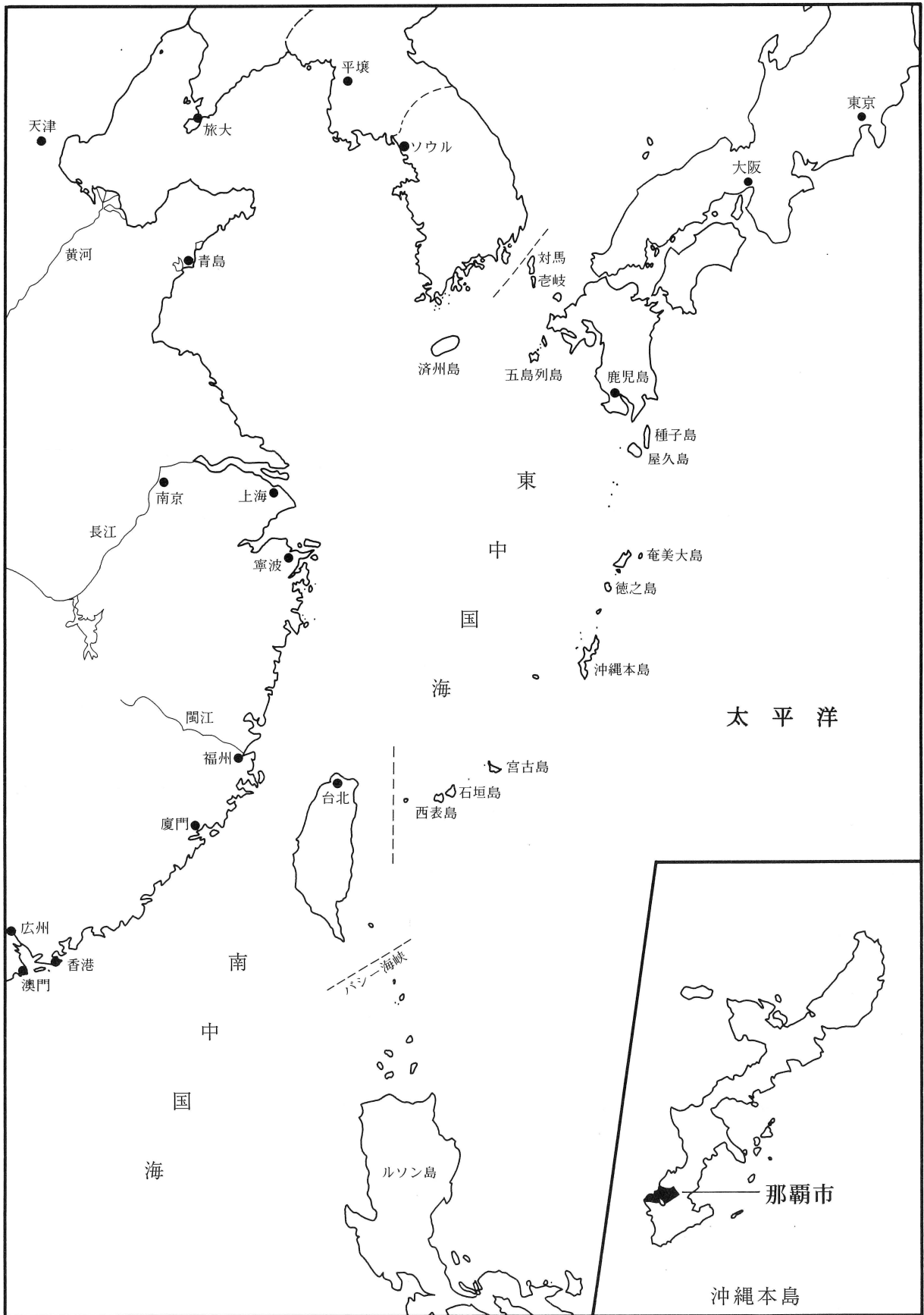
首里桃原町1丁目11番6号でのマンション建設に伴う『埋蔵文化財事前審査願』が、2000(平成12)年10月13日付けで株式会社沖縄大京より本市教育委員会に提出された。それを受けて、本市教育委員会文化財課では、マンション建設予定地内での埋蔵文化財の有無を確認するため、2000(平成12)年12月6～8日の3日間にわたり試掘調査を行った。当初、今回のマンション建設予定地が、尚泰王の四男である尚順(松山王子)の屋敷跡に含まれることから、それに関係するなんらかの遺構の検出が予想されたが、試掘を行った結果、残念ながら建設予定地のほぼ全体が地山まで現代の攪乱を受けており、内部に現代遺物を多く含む攪乱土坑が随所にみられた。しかし、地山より上位に近世以前の遺物包含層は確認できなかったものの、地山を掘り込んで構築した内壁面に石積みを伴う方形土坑1基を検出することができた。この点について、本市教育委員会と株式会社沖縄大京の2者が協議し、その結果、この遺構1基を対象とした今回の発掘調査を行うことになった。

発掘調査は、株式会社沖縄大京から本市教育委員会が委託を受け、2001(平成13)年1月9日から同年1月19日まで行い、同年1月23日に調査を行った範囲をバックホーにより埋め戻し、調査前の状態に復した。

## 第2節 調査組織

本遺跡の調査組織は次のとおりである。

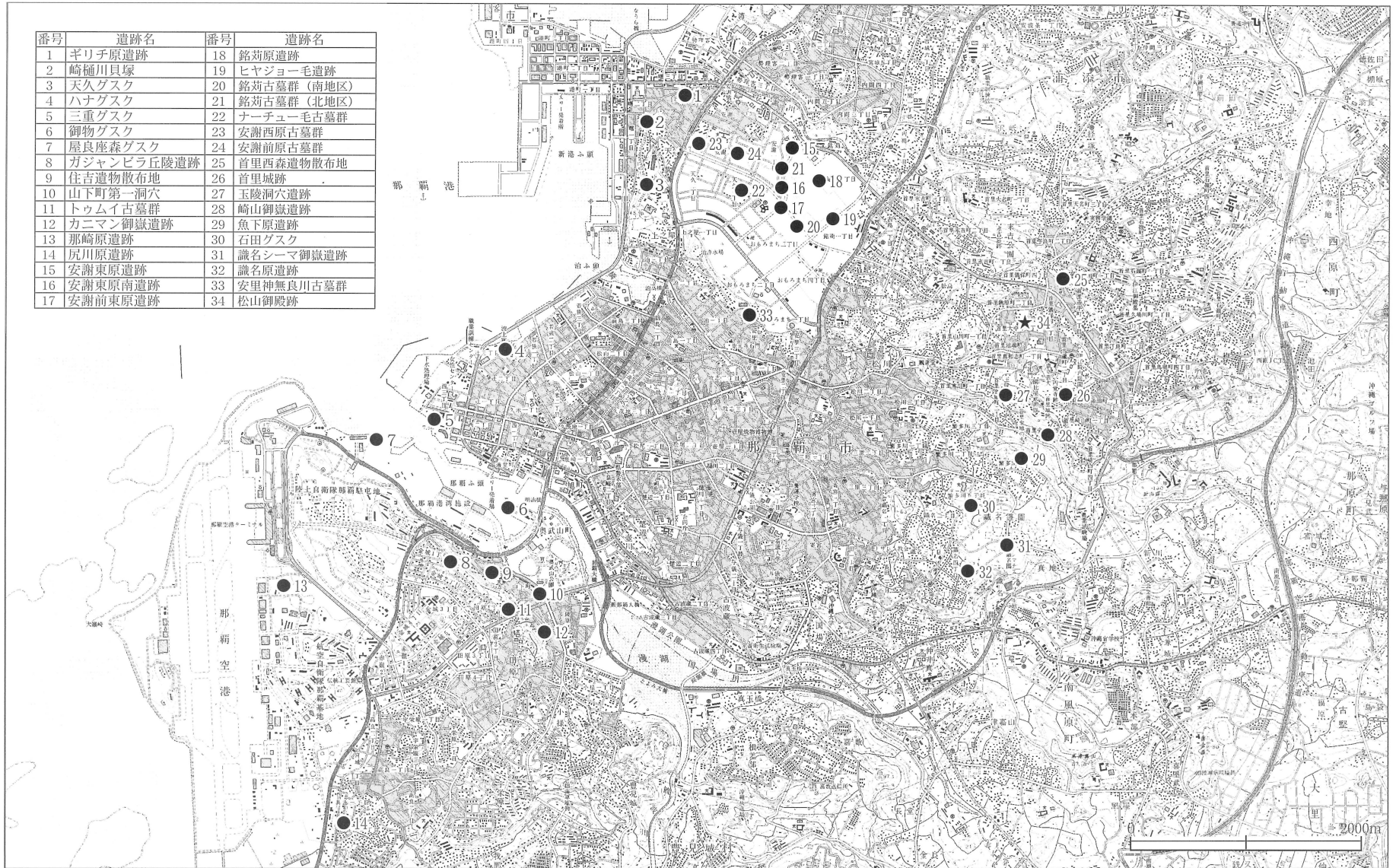
調査責任者	那覇市教育委員会	教育長	渡久地 政 吉
〃	那覇市教育委員会文化財課	課 長	金 武 正 紀
調査 総括	〃	〃	金 武 正 紀
調査 事務	〃	主幹兼係長	古 塚 達 朗
〃	〃	係 長	喜 納 曙
〃	〃	主任主事	親 川 登
〃	〃	〃	森 田 勝
調 査 員	〃	主 査	島 弘
〃	〃	主任主事	玉 城 安 明
〃	〃	主 事	仲宗根 啓
〃	〃	〃	當 間 麻 子
〃	〃	〃	當 銘 由 嗣
発掘作業員	奥 濱 悦 子	照喜名 武 子	宮 城 新 一



第 1 図 那覇市の位置



番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	ギリチ原遺跡	18	銘苅原遺跡
2	崎樋川貝塚	19	ヒヤジョー毛遺跡
3	天久グスク	20	銘苅古墓群 (南地区)
4	ハナグスク	21	銘苅古墓群 (北地区)
5	三重グスク	22	ナーチャー毛古墓群
6	御物グスク	23	安謝西原古墓群
7	屋良座森グスク	24	安謝前原古墓群
8	ガジャンピラ丘陵遺跡	25	首里西森遺物散布地
9	住吉遺物散布地	26	首里城跡
10	山下町第一洞穴	27	玉陵洞穴遺跡
11	トゥムイ古墓群	28	崎山御獄遺跡
12	カニマン御獄遺跡	29	魚下原遺跡
13	那崎原遺跡	30	石田グスク
14	尻川原遺跡	31	識名シーマ御獄遺跡
15	安謝東原遺跡	32	識名原遺跡
16	安謝東南遺跡	33	安里神無良川古墓群
17	安謝前東原遺跡	34	松山御殿跡



第 2 図 那覇市内の遺跡分布図

## 第Ⅱ章 調査の成果

今回調査を行った場所は、かつて琉球国最後の国王尚泰の四男である尚順（1873～1945）の屋敷地の一部であった。尚順は、松山王子、または松山御殿とも称されたことから、今回の調査地の遺跡名を「松山御殿跡」とした。松山御殿の屋敷地は、1879（明治12）年の廃藩置県後に小禄御殿・伊是名殿内・湧川殿内の跡地を合わせたものであるという（注1）。今回の調査で検出した遺構及び主体となる遺物は17世紀以前のものであることから、実際には松山御殿とは関係がないものである。『首里古地図』・『球陽』等の史料を参考にすると、今回検出された遺構・遺物は、湧川殿内に関連するものである可能性が高い。以下に、今回の調査成果の概要を記す。

### 《層序》

4枚の層序が確認され、第4層が地山となる島尻マージ土層である。

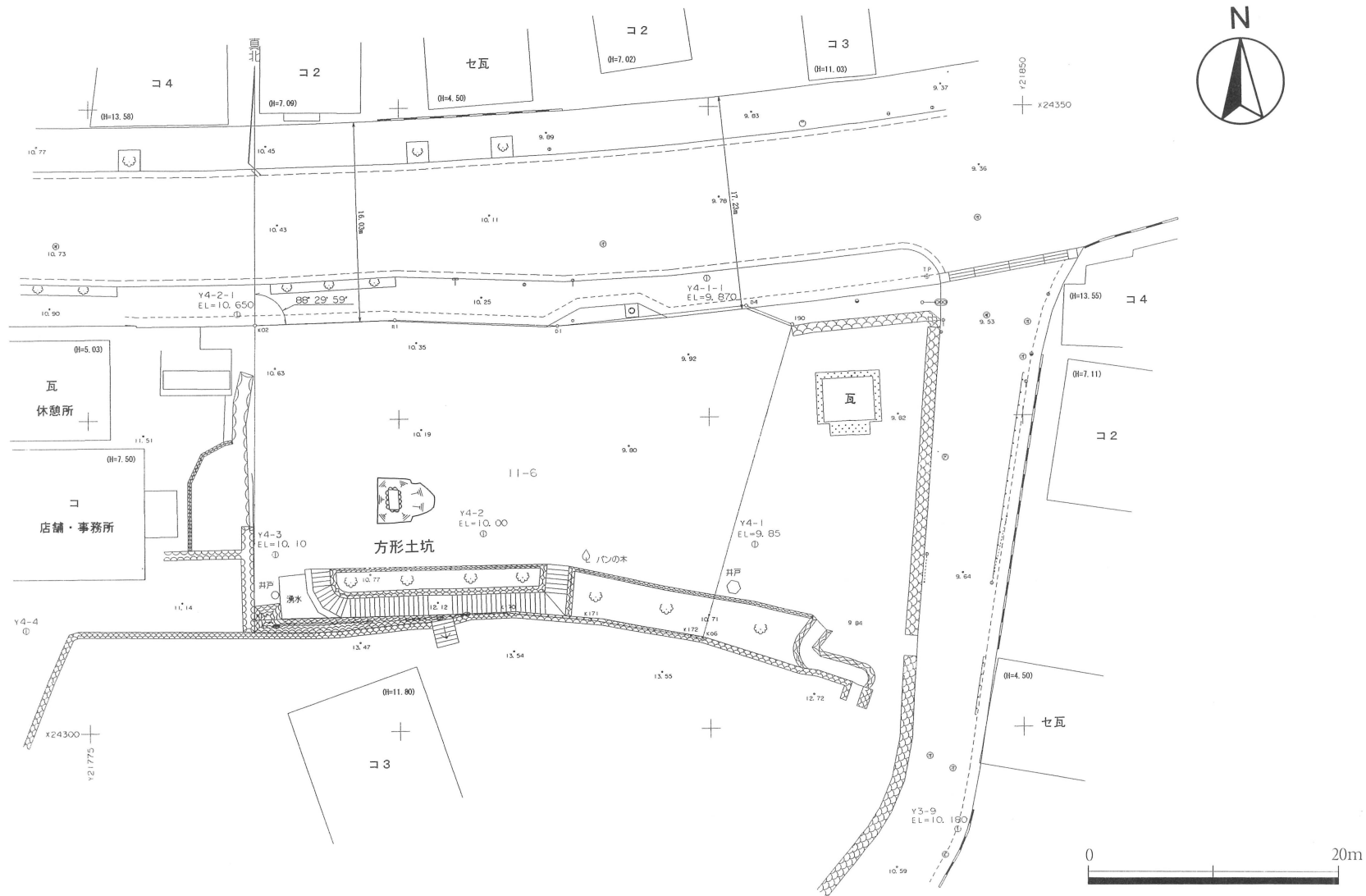
「調査に至る経緯」でも述べたように、マンション建設予定地での試掘調査の結果、地山まで現代の攪乱を受け、攪乱土坑が数ヶ所で確認された。この攪乱を受けた表土が、第1層となる。今回調査を行った方形土坑1基は、地山を掘り込んで構築しているため、攪乱による破壊を免れている。

方形土坑の調査を開始するまで、近世以前の遺物包含層は残存しないものと考えられたが、調査開始後に方形土坑の南側で東西方向に傾斜する黒色土層（第3層）が確認された。黒色土層の直上は、地山と同質の島尻マージ（第2層）で覆われていたために、その確認が遅れた。第3層は、調査地南壁面の土層堆積状況（第4図）から確認すると、東側が低くなるように傾斜していた。しかし、マンション建設予定地東側での試掘坑では第3層と同様の黒色土層は確認されず、方形土坑の北側・西側にも、そのひろがりが出しできなかったことから、第3層の堆積は局所的なものと考えられた。あるいは、土坑または溝となる遺構の一部が残存したものかもしれない。第3層は、東側で大型の攪乱土坑により分断されていた。また、第3層の堆積は調査地の南側にのびていたが、マンション建設による掘削範囲から外れているため、それ以上の調査は行わなかった。

第3層から得られた遺物では、明朝系瓦と褐釉陶器（壺等）の出土が比較的に目立つ。明朝系瓦では、上原静氏により第Ⅰ文様系B群に分類される軒丸瓦の瓦当部が出土している（注2）。その他に、15～16世紀に位置付けられる薄手外反白磁皿や青花皿があり、瓦質土器（鉢）も出土している。また、小片1点のみの出土ではあるが、沖縄産陶器の胴部片が出土している。この種のものには、沖縄産の無釉陶器に分類することがあるが（注3）、内外面に泥釉を施し、素地土中に白い筋が確認できる。これらの特徴から、概ね17世紀に収まるものとする。第3層からは、明らかに18世紀以後のものとなる遺物は出土していない。

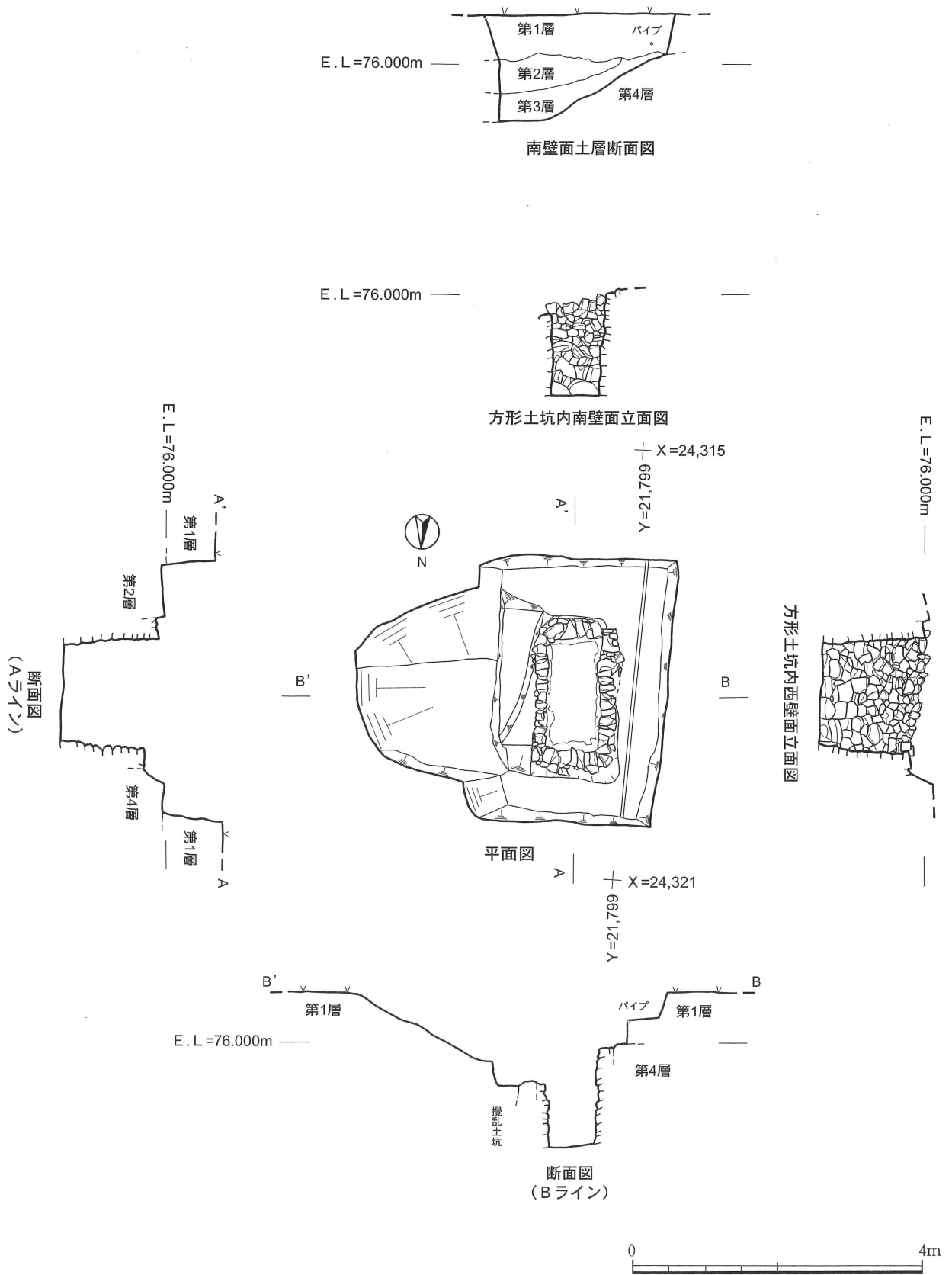
### 《遺構》

方形土坑1基が、検出できた（第3・4図）。土坑内壁面の周囲4面に石積みを構築するが、底面には石敷面がなく、地山面が直接露出している。壁面に積み上げられた石は、丁寧に面取りされたものではなく、粗割りによる整形に近いものであろう。全体的に、大きめの石を壁面の下部に使用し、上部にはそれよりもやや小ぶりの石を用いる傾向がみられた。土坑内方形石積面の大きさは0.7m×



第 3 図 遺構位置図





第4図 遺構平面図・断面図・立面図

1.5m程で、地山上面からの深さは約1.4mであるが、遺構上部は現代の攪乱により幾分破壊されていることが考えられるため、本来はもっと深いものであったと推察される。

土坑内に堆積した土壌は、暗褐色または暗灰色を呈し、粘質性はあまりなく、細かい砂粒状であった。有機物を多く含んだ土壌であると考えられる。

方形土坑は、第2～4層を掘り込んで構築していることが、調査時の土層観察から確認できた。第3層出土の遺物から考えて、土坑の構築年代は17世紀以後ということになる。

#### 《遺物》

今回、第3層出土の遺物の詳細については、紙数の都合で割愛せざるをえなかった。後日、なんらかのかたちで報告する機会をもちたいと考える。以下では、方形土坑内出土の遺物について述べる。

方形土坑内から出土した遺物を、第5・6図に図示した。

第5図1～6は、中国産となる青花である。器種としては、1～4が碗、5が袋物（瓶？）、6が比較的大きめの壺となる。第5図7は、中国産の五彩碗であろう。器面の色釉が殆ど消失し、一見、白磁碗のようである。外面には、緑色・黄色・赤色などの色釉が、僅かに残存する。器面に、かつての文様のかたちが確認できるが、そのモチーフについては不明である（一つは、人物像か？）。第5図8は、いわゆる「白釉陶器」（注4）であると考えられる。外底面に低い段を有し、やや高台状となる。外底面の縁側には、直径約75mmの丸い窯道具痕と考えられるものが確認できる。第5図9は、褐釉陶器の小型壺である。第5図10は、沖縄産陶器の炉（香炉？）になるものと考えられるが、器形的にあまり類例をみない資料である。口縁上部の平坦な水平面に、透かし彫りを施す。器面に泥釉を施すようであるが、判然としない。その特徴から、17世紀のものと考えられる。

第6図1～3は、明朝系瓦である。1は、平瓦となる資料である。狭端長は166mm、全長は225mmとなる。2・3は、丸瓦となる資料である。2は、軒丸瓦の瓦当部である。上原氏により第I文様系B群に分類されるものと考えられるが（注5）、小片資料のため、判然としない。3は、凸面玉縁部に4条の沈線が確認できる。これと同様のものが、土坑内からもう1点得られている。筒部幅は133mm、玉縁長は45mmとなる。

#### <注>

- 1、『角川日本地名大辞典47 沖縄県』角川書店 1986年 487頁
- 2、上原静「首里城跡西のアザナ地区出土の明朝系瓦とその推移」『南島考古』No.14 沖縄考古学会 1994年11月
- 3、沖縄県教育委員会『喜友名貝塚・喜友名グスク』1999年3月、那覇市教育委員会『識名原遺跡』 2001年3月
- 4、沖縄県教育委員会『首里城跡』1998年3月
- 5、注2文献と同じ。

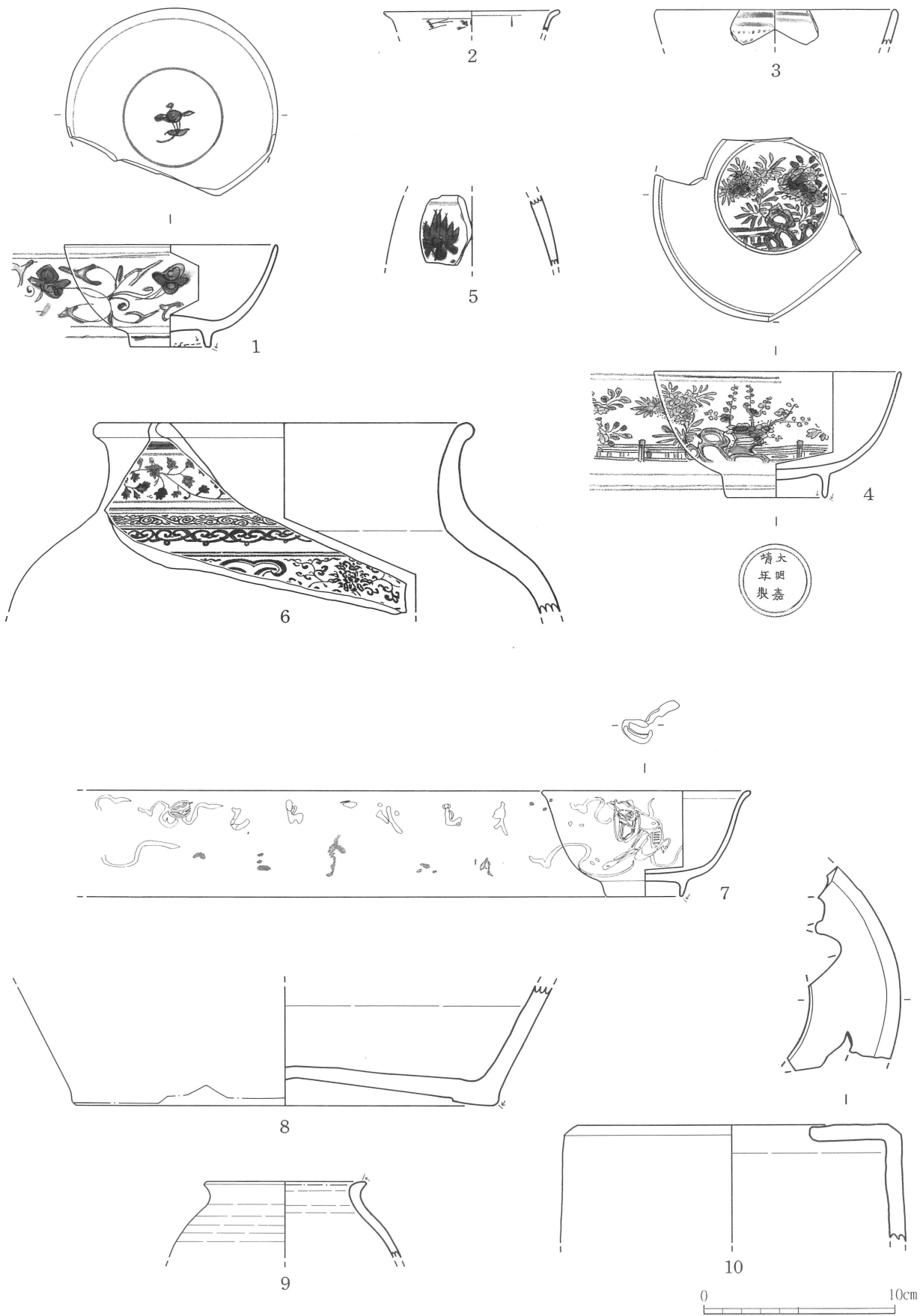
第1表 陶磁器観察一覧

挿図番号 図版番号	種別	器種	口径 器高 底径 (mm)	素地	施釉
第5図 1 PL.4の1	青花	碗	114 54 42	白色で微粒子。	総釉
“ 2 “ 2	青花	碗	92 — —	白色で微粒子。	内外面に施釉
“ 3 “ 3	青花	碗	124 — —	白色で微粒子。	内外面に施釉
“ 4 “ 4	青花	碗	130 67 52	白色で微粒子。	畳付けを除き、 総釉
“ 5 “ 5	青花	袋物 (瓶?)	— — —	白色で微粒子。	内外面に施釉
“ 6 “ 6	青花	壺	202 — —	白色で微粒子。	内外面に施釉
“ 7 “ 7	五彩	碗	110 56 39	白色で微粒子。	畳付け及び高 台内は露胎
“ 8 “ 8	白釉陶器	不明	— — 221	乳白色で微粒子。	外底面は露胎
“ 9 “ 9	褐釉陶器	壺	— — 221	暗茶褐色で細粒子。 暗褐色粒や白色鉱物 粒等が散見される。	口唇部は露胎
“ 10 “ 10	沖縄産陶器	炉 (香炉?)	82 — —	暗茶褐色。白い筋が 多くみられる。	泥釉を施すも のであろうか

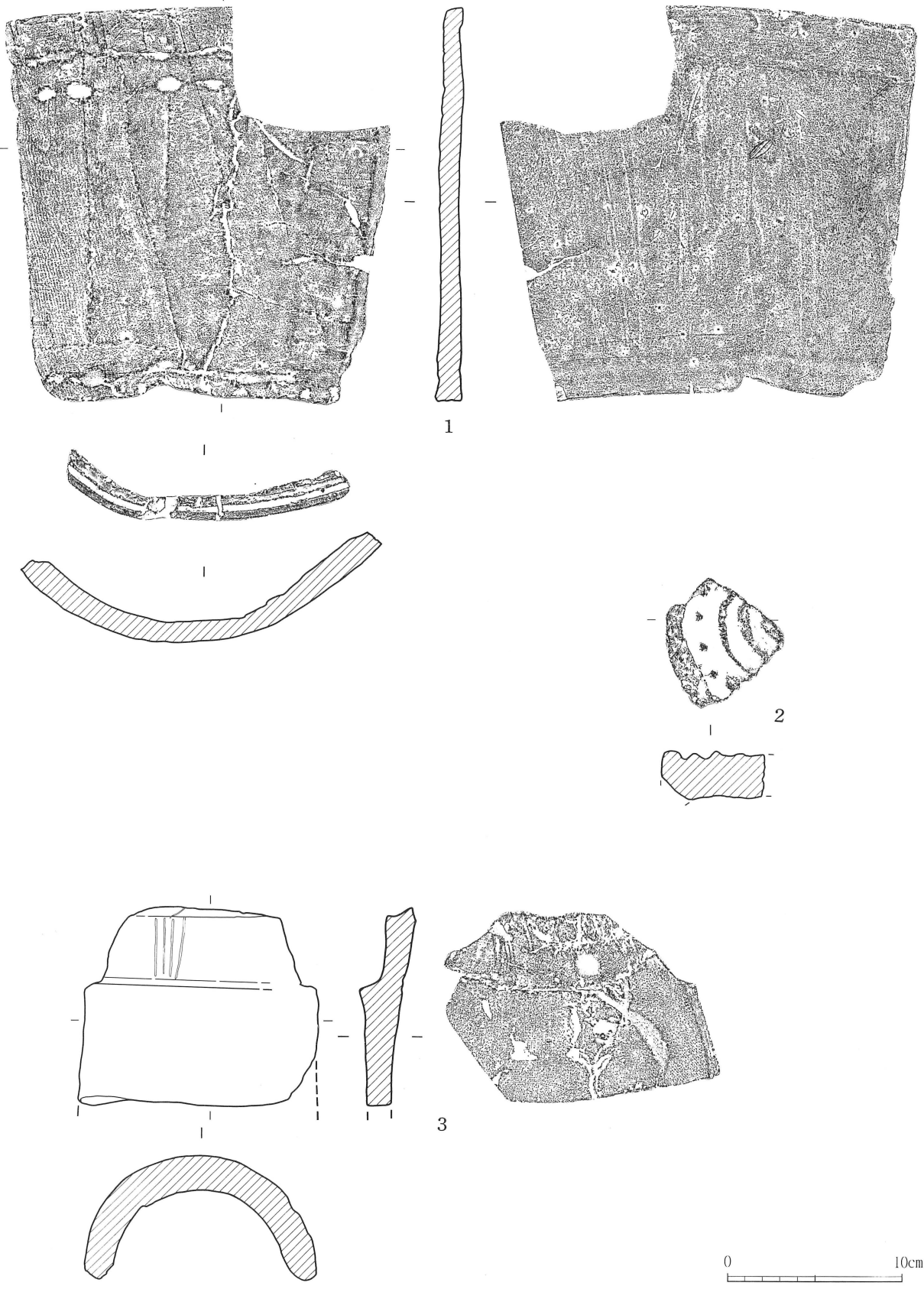
第2表 明朝系瓦観察一覧

挿図番号 図版番号	分類	色調	厚さ (mm)	素地
第6図 1 PL.5の1	平瓦	暗褐色	10~15	赤銅色。堅緻。沖縄産無釉陶器に質感が 近い。
“ 2 “ 2	丸瓦	暗灰色	11~26	暗灰色。
“ 3 “ 3	丸瓦	茶白色	15~24	暗灰色。





第5图(PL. 4) 陶磁器



第 6 图 (PL. 5) 明朝系瓦

### 第Ⅲ章 まとめ

今回のマンション建設に伴う緊急発掘調査は、調査地が松山王子尚順のかつての屋敷跡に含まれる場所であったことから、遺跡名を「松山御殿跡」としたが、実際の調査成果は、それより前の湧川殿内に関連するものであることが考えられる。今回の調査で瓦片が比較的多く出土していることから、16～17世紀頃の湧川殿内（その当時は、見里按司・越来親方などの役職）の屋敷は、瓦葺の建物であったと推察される。

以下では、今回検出された方形土坑のもつ機能的性格とその構築年代について考察し、まとめとしたい。

結果から先にいえば、検出された方形土坑は「シーリ」と呼称される施設であることが考えられる。シーリとは、『沖縄語辞典』（注1）では「肥だめ」のことであるとしている。『那覇市史』（注2）には、「ミンタナシーリ」という民家の台所に付随する施設に関する記述がある。これは、生活廃水を溜める汚水溜めのことであるという。ミンタナとは、「流し場」のことである。ミンタナシーリの水は栄養分が多いため、野菜の肥料として使用したようである。近世琉球の農書である『安里村高良筑登之親雲上田方并芋野菜類養生方大概之心得』にも、「しりり水」の記述があるから、近世には汚水溜め（シーリ）の水が作物の肥料として使用されていたのであろう。同じ性格を有すると考えられる遺構の検出例としては、壺屋古窯群（注3）の石組遺構がある。報告では、シーリのもつ機能を日常生活で発生する生ゴミを蓄える貯蔵施設とし、腐敗後に畑にまく肥料にしたとしている。実際、松山御殿跡で検出された方形土坑内からも、牛・馬・豚等の家畜の骨片が多く得られており、食料残渣を腐敗させ、畑の肥料とするための貯蔵施設であるとも考えられる。一口にシーリといっても、肥溜め・汚水溜め・食料残渣の貯蔵施設など、その使用方法に幾分かの違いが考えられる。この事は、各遺跡でのシーリ遺構検出時に、その使用方法について若干の検討を要することを示している。

ところで、シーリは農業に関係する遺構ということになるが、松山御殿跡（湧川殿内跡）から検出した方形土坑をシーリと考えるならば、士族階級の屋敷内で畑作に必要な肥料をつくっていたことになる。士族の屋敷でも家庭菜園的に簡単な野菜栽培を行っていたか、あるいは近隣の農家に屋敷内で作った肥料を売却（譲渡）していたのではないだろうか。天界寺のような寺跡でも、シーリに類似した遺構が検出されており（注4）、上述したような問題はここでも発生する。今後の検討課題として残る。

最後に、方形土坑の構築年代であるが、第3層及び遺構内からの出土遺物から、17世紀に構築され、廃棄されたことが推測される。土坑内出土の遺物には、ある程度伝世され、16世紀代まで溯る可能性が高い資料もあるが、全般的に遺構の構築・廃棄年代は17世紀でよいと考える。

<注>

- 1、国立国語研究所（編）『国立国語研究所資料集5 沖縄語辞典』六刷 1980年 471頁
- 2、『那覇市史 資料篇 第2巻中の7 那覇の民俗』1979年 201頁
- 3、那覇市教育委員会『壺屋古窯群Ⅰ』1992年3月
- 4、沖縄県立埋蔵文化財センター『天界寺跡（Ⅰ）』2001年3月

## 付篇 旧松山御殿敷地の歴史的経緯

現在の首里桃原町1丁目2番地は、いわゆる琉球王国最後の国王尚泰の第4王子であった松山王子尚順の屋敷として知られている。彼は、明治・大正時代を代表する経済人であったが、同時に稀有な趣味人でもあった。その好んで使用した号が、「驚泉」である。「驚泉」とは、この地に所在するいわゆる佐司笠樋川にちなんだ号である。

さて、旧松山御殿敷地を歴史的に検証するに当たり、まず1700年ごろに製作されたという「首里古地図」を見たい。そこには、「湧川」と「宜野湾親方」と記されている。1924（大正13）年、尚順がこれらの敷地を買上げ、屋敷を拡張して桃原農園を開いたのであった。

主となる部分を占める湧川家は、家譜によると、三司官をはじめ、その多くが王府の要職を務める名家であった。その元祖は、第2尚氏王統第2代国王で、初代尚円王の弟であった尚宣威王の長子越来王子朝理である。2世勝連王子朝孟は、幼少であったため、朝理の弟の見里王子朝易が跡を継いだ。この朝易の室が佐司笠按司である。

佐司笠按司は、第2尚氏王統第3代国王尚真の長女で、その母親は、組踊「銘刈子」でつとに有名な茗苺子（＝家譜記載のとおり）と天女の間に来た娘であった。この天女伝説については詳細に触れないが、『球陽』（1745年）の尚真王10年の項に続く「附安謝邑の茗苺子、神女に逢ふ」や『琉球国由来記』（1713年）の「銘刈子祠堂」の項に詳しい。

件の銘刈子と天女の間には、2人の男子が誕生したが、いずれも夭逝してしまい、女子1人だけが長ずるにおよんだ。それが尚真王の夫人として迎えられ、銘刈子には「浮織之冠」と「請地」を賜った。しかし、銘刈子に嗣子がなかったために、外孫に当たる佐司笠按司が譲り受けた（註：「銘刈子」は、原文のまま）。

『琉球国由来記』によれば、安謝村の銘苺子の旧跡に、彼の画像を備えた祠堂があり、11世朝略から「外鼻祖」として代々まつようになったという。麦・稲のウマチーごとに（年4回）、三日崇とまつりの当日に、穂、花米9合、五水2合、神酒2合が安謝村の百姓から供えられ、5月のウマチー（稲穂祭）に、シロマシ、五水8合が朝略から供えられ、多和田ノロの司祭によって祭祀が行われた。

ちなみに、5世朝首の時（1623年）に越来間切の総地頭となり、この朝略の時（1703年）、越来王子朝奇（具志頭家）の名を避け、「湧川」と改名している。

さて、彼の佐司笠按司は、長じて朝易に嫁した。その際、尚真は、新たに朝易の屋敷に「室堂」をつくったという。その屋敷内には、大きな榎樹（伝承ではアコウという）があった。そこには、いつも白鷺がとまっていた。佐司笠按司はこれを見て、「白は金に属し、金は水を生ず。今、白鷺の此の樹に投宿するを見れば、必ずや彼の榎樹下、清水有りて湧出せんや」といった。果たして、その木の下を掘ったところ、清水が湧き出たといい、これを「佐司笠泉」と名付けたことが、『球陽』に記されている。

佐司川樋川は、「驚泉」とも呼ばれたが、徐葆光の『中山伝信録』（1721年）や周煌の『琉球国志略』（1757年）には、「笠泉」と記されている。

6世朝但の時（1582～1638年）、大早魃に襲われ、国中の田野が枯渇し、大中・桃原の両村も水に困窮したため、別に門を開いて佐司笠樋川の水を自由に利用させ、多くの人々を救った。そのためか、戦前は、東側の入口に門はなく、内側の石垣の門に扉があったという。

次に、「首里古地図」に宜野湾親方と記されている屋敷は、第2尚氏王統第3代国王尚真の長子である浦添王子朝満を元祖とする小禄御殿である。摂政、三司官はもとより、国王まで輩出した名家中の名家である。

2世浦添王子朝喬、3世尚懿王を経て、4世～9世は具志頭を称し、10世に至って尚穆王の四子であった宜野湾王子朝祥を養子に迎えた。ちなみに朝祥は、1789（乾隆54）年に宜野湾間切総地頭職となり、「宜野湾」を称している。

朝祥にも男子がなく、尚穆王の五子である美里王子朝規の長男朝恒を養子に迎え、1821（道光元年）年、義父の跡を継いで宜野湾間切総地頭となり、「宜野湾按司」と称した。1834（道光14）年、朝恒は小禄間切総地頭職に転任し、宜野湾間切は兼領となっている。ここから、「小禄」を称するようになる。

朝祥は、尚瀬王の摂政を務め、歌人としても高名で、和歌『沖繩集』（1870年）に、琉歌を『古今琉歌集』（1895年）に残している。また、1790（乾隆55）年、徳川將軍家斉の慶賀正使として「江戸上り」の一行を率いた。その途中、第2尚氏王統第7代国王で、薩摩の琉球入りの結果、江戸への道行きを余儀なくされた尚寧に同行し、途中客死した弟の尚宏具志頭王子朝盛の眠る、静岡県清水市の巨龜山清見禅寺に、その菩提を弔い、「永世孝享」の扁額を奉納している。その扁額は、今日も本堂に掲げられている。朝盛は、小禄御殿の4世であり、10世の朝祥は、古くなった墓所の改築も、この時行っている。

11世朝恒も歌人であり、琉歌、和歌をよくし、「沖繩三十六歌仙」の一人である。

12世は、分家の羽地御殿の分家の森山御殿のさらに分家の善平殿内から朝睦を迎え、13世高良按司朝亮へと受け継がれたが、この間、朝睦の時に廢藩置県を迎えている。朝亮は、家督を相続して小禄を名乗り、後に首里織工場長となり、沖繩初の常設の芝居となった「仲毛芝居」を創設している。

<参考文献>

嘉手納宗徳、「首里古地図」、嘉手納宗徳、1968年

山里永吉、「尚順男爵と私一驚泉松山王子伝」、『松山王子尚順を語る座談会』、『松山王子遺稿』、尚順遺稿刊行会、1969年  
琉球史料研究会、『琉球王代記・氏姓集・年代記・系図手本』、琉球史料研究会、1970年

横山重、『琉球史料叢書第三巻 琉球国舊記』、東京美術、1972年

横山重、『琉球史料叢書第二巻 琉球国由来記』、東京美術、1972年

沖繩タイムス社、「思い出のわが町33 桃原町」、『沖繩タイムス 1976(昭和51)年12月9日(木)朝刊』、沖繩タイムス社、1976年  
球陽研究会、『球陽』、角川書店、1982年

那覇市企画部市史編集室、「向姓家譜」（小禄家）、「向姓家譜」（湧川家）、『那覇市史 資料篇』第1巻7 家譜資料三、那覇市企画部市史編集室、1982年

沖繩第百科事典刊行事務局、『沖繩大百科事典』中巻、沖繩タイムス社、1983年

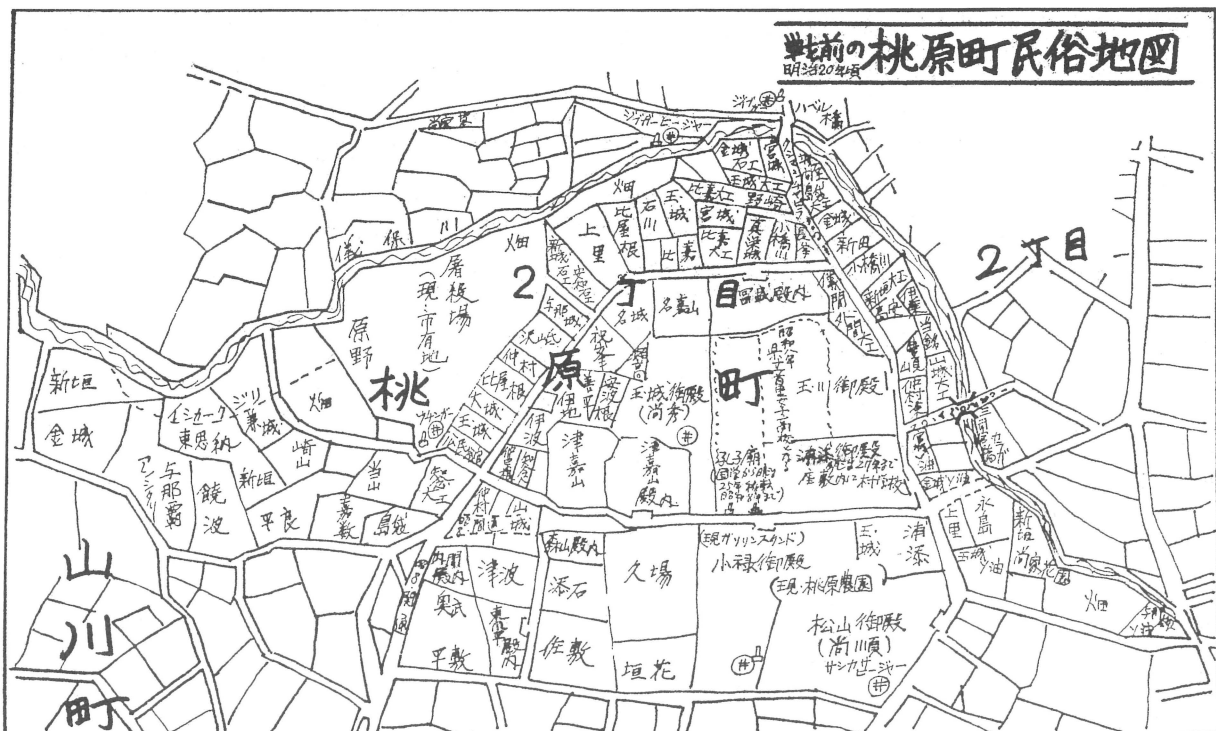
沖繩県姓氏家系大辞典編纂委員会、『沖繩県姓氏家系大辞典』、角川書店、1992年

首里昔語り地図編集委員会、『首里昔語り史跡マップ』、那覇市首里自治会長連絡協議会、1993年

古塚達朗、「琉球人の墓を訪ねて—江戸上りのルートをたどる」、『地域と文化』第75号、ひるぎ社、1993年

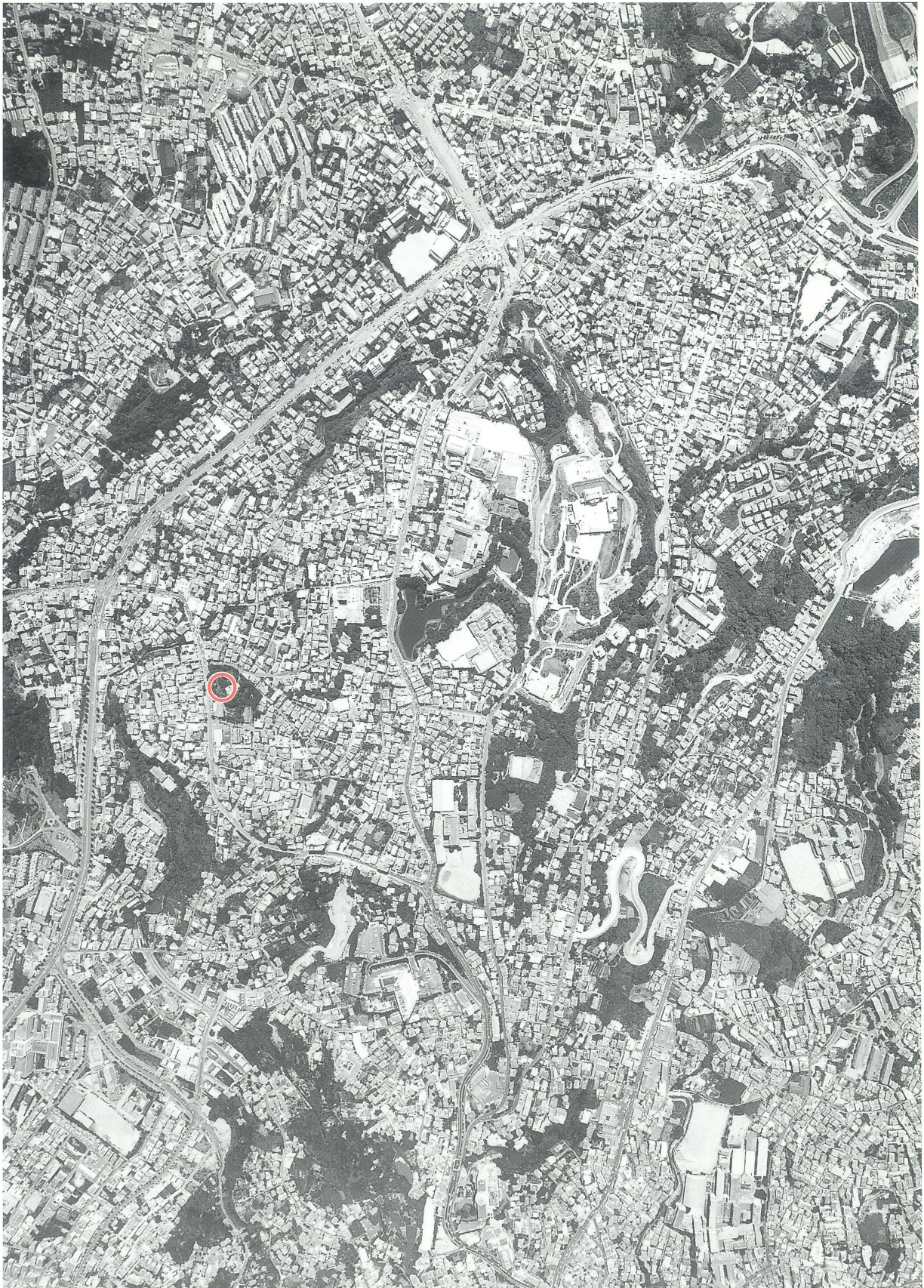


「首里古地図」に見える、「湧川」・「宜野湾親方」の屋敷（湧川家の一角に佐司笠樋川が見える）



沖縄タイムス1976(昭和51)年12月9日(木)朝刊「思い出のわが町」に見る、昭和初期の様子





PL.1 遺跡一帯の空中写真（1993年撮影、1：10,000）

〈上が北〉



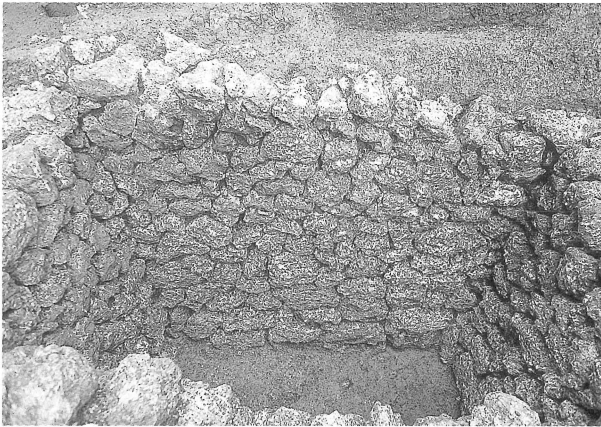
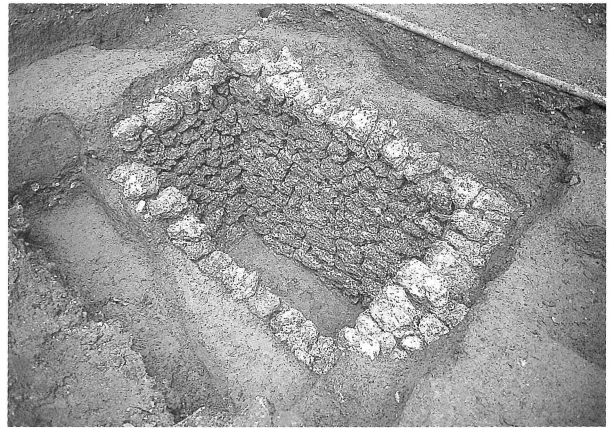
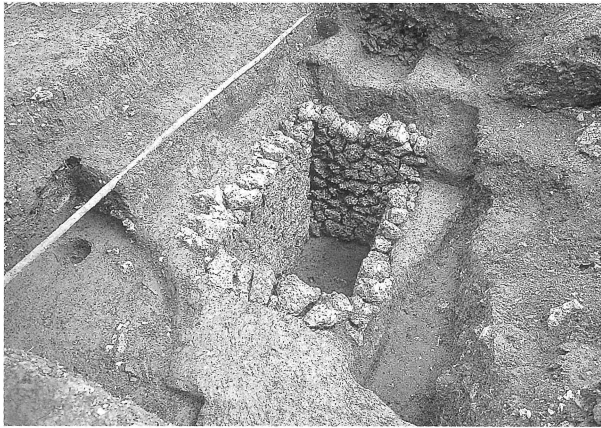


PL.2 調査状況 (1)

上：遺跡近景 (北西側から)

下：方形土坑完掘状況 (北側から)





PL.3 調査状況 (2)

1段目左：方形土坑完掘状況(南東側から)

2段目左：発掘作業状況(北側から)

3段目左：方形土坑内西壁面

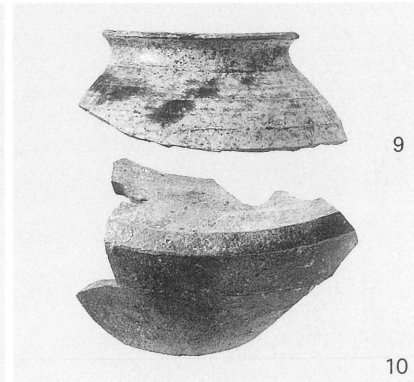
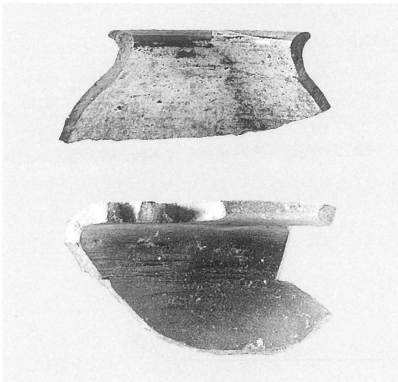
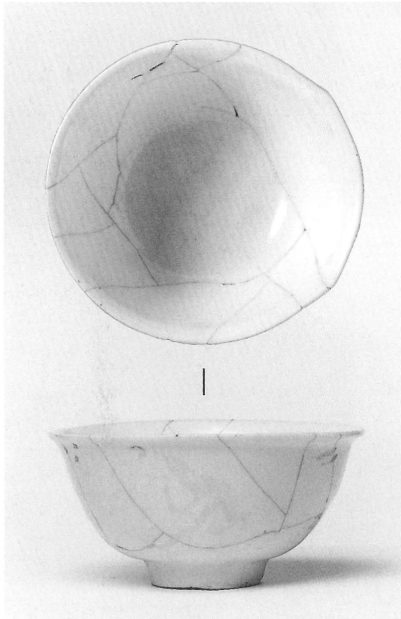
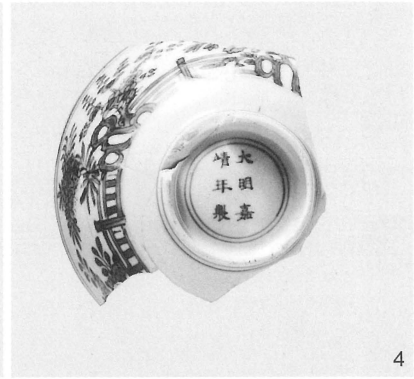
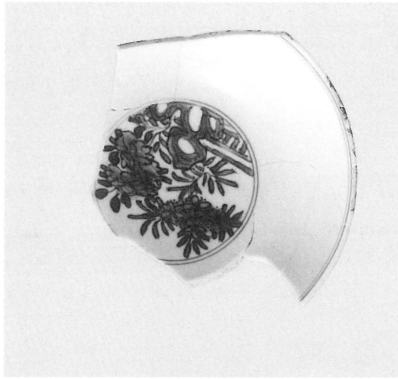
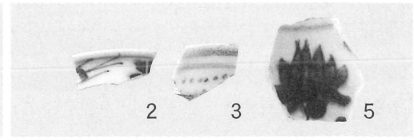
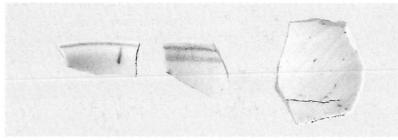
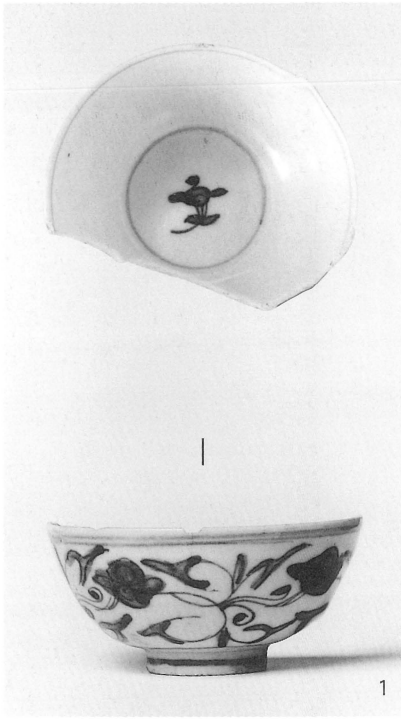
4段目左：南壁面土層堆積状況

1段目右：方形土坑完掘状況(北東側から)

2段目右：実測作業状況(南側から)

3段目右：方形土坑内南壁面

4段目右：南壁面土層堆積状況

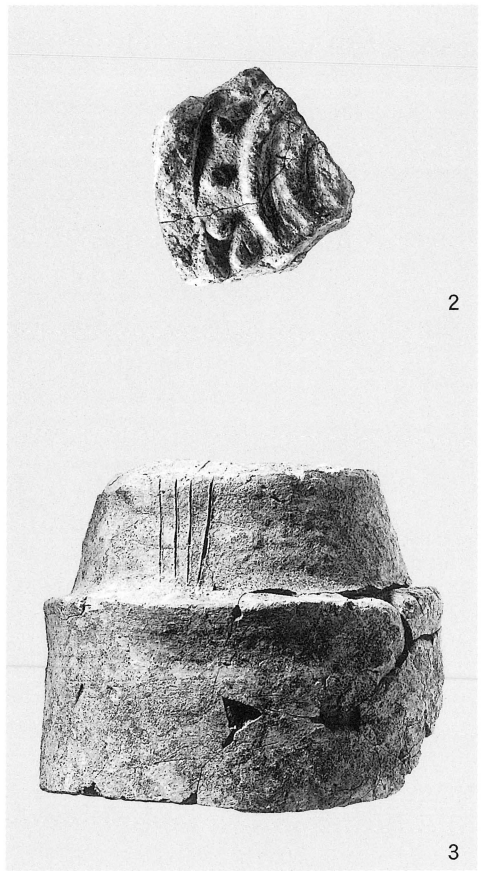


PL.4 (第 5 图) 陶磁器





1



2

3



PL.5 (第 6 图) 明朝系瓦

---

那覇市文化財調査報告書 第55集

松 山 御 殿 跡

— マンション建設工事に伴う緊急発掘調査報告 —

発 行 2002年3月31日  
那覇市教育委員会  
〒900-8553 沖縄県那覇市樋川2-8-8

編 集 那覇市教育委員会 文化財課  
TEL 098-853-5776  
FAX 098-833-2202

印 刷 合資会社 精印堂印刷  
〒902-0072 沖縄県那覇市字真地399-3  
TEL 098-832-1311  
FAX 098-832-8380

---